
仮定

花霞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮定

【Nコード】

N5804N

【作者名】

花霞

【あらすじ】

主人公の時雨杏が来た学校は
超お嬢様・おぼっちゃま学校だった。
そこには変わった人々が・・・
杏が求める平凡が崩れていくのだった。

序話

「どっ……どうしよう……!!」

目の前には大きく広がる豪華な門。

私はただ一人大きなバックを持って立っていたのだ。

……まあ、取りあえずここは学校らしい。

しりつじゅあうがくえん
私立樹桜学園。全寮制の上にこの外見。

完璧のお嬢様・おぼっちゃま学校だったりする。

そしてどうしてこの学校にこのごくごく平凡の私、しぐれ時雨 あん杏が
いるのかというのはおいおい話していくことにしよう！

話す前に校長に挨拶！そして友達たくさん作るぞ！！

「その前にこの門……。どうすればいいの？」

1・乗り越える

無理に決まってるわ！身長は普通だけど門がでかすぎる！

2・周りの人に聞く

……誰もいないわ……

3・チャイムを探す！

「さああああああんっ！！3よ！！3しかないわっ。」

さあさあ、さっさと探すわよ！

『ぶっ！つくつくつくっ……』

「？」

どこからか笑う声が聞こえた。

「えっ？誰？」

『あははっ！！君。時雨 杏だよね？ここだよ！門の柱。』

すぐに門の柱を見るとカメラ付きのチャームがあった。
赤く点滅似てるということは話している人はずっと私を見てた？

・・・ってか私の叫びとかも聞いてたのよね？

顔がみるみる赤くなるのが分かった。

「っ

「！

『ありや！！君かわいいなあ？』

何をほざいているんだあッ！見知らぬ人よっっ！

『…ぷっくり唇にパツチリ二重の目、さらっと腰まで伸びた黒髪…
マジタイプ』

見知らぬ人は何かをボソリと何かを言った。

「ふえ？？」

『ああ・・・何でもないよ！今、門開けるね』

その人の声とともに大きな門が音を立てて開いたのだった。

男

「うわぁ・・・」

広い。

中央には花が咲き乱れてる。

「どう？凄いでしょ？ここ。」

男が自慢してるような口調で訊いてくる。

お前の家じゃないだろうにっ！

「うん。すごく広い・・・あれ？そっか、あなたの名前って何？
そうだ。」

私はまだこの男の名前を聞いてなかった。

確か小学校の頃知らないおじさんにはついて言っちゃいけないと聞いたような。

少し間が空いた後、男は口を開いた。

「堯人。鈴原堯人。」

「へえ。まあよろしくね。」

「ああ。てかお前何組？」

「えーっと私はB組。」

「ならこの階の上だな。エレベータで行けよ。」

「ありがとう。」

「あ、これやる。」

何か渡してきた。

あ、袋からして飴だな。

杏が思った通り、ピンク色の飴が入ってた。

「食べなよ。美味しいぜ？」

なんかせかしてきたな。

コイツ。

そんなくらい美味しいんだろう。

杏は飴をほおばった。

そのとき。

「せんせい！この娘が飴食べてます。校則違反です。即刻生徒指導室へ！」

・・・な？

女

「ちよ…！」

すると、どこからか先生が走って迫ってくる。

「せんせー、この娘ですよー、イチゴ飴なめてますよー、今日のパ
ンツはイチゴがらなんすかくほっ！」

言い終わる前に、思い切り顔面をけり飛ばしてやる。

「君！何やってるんだ！」

「あ、やば…」

飴を食べただけじゃなく、先生の前で人を蹴るという行為の重さに
今更気付く。

ふと、足元を見ると堯人の顔が上を向いて転がっていた。

しかも、目を開け杏のスカートの中をのぞいている。

「変態か！」

もう一発、顔面に一発くれてやったが、こっちに非はないはず、と
一人で納得してみる。

が、そうもいかないみたいだった。

「君！、うちの理事長の孫の堯人さまに何をするんだ！」

「え…？こいつが理事長の孫？」

そういえば、理事長が自分に孫がいる、てきな事を言っていた気が
するが…

「こいつがその孫なんですか！？」

「ああ、この方こそ未来の樹桜学園理事長！堯人さまであられる！」

その未来の理事長さまはまだ床に寝ているのだが

「こんな変態が理事長になったら、この学園終わりますよ！？」

「君！、いい加減にしないか！その言動といい、行動といい、今す
ぐ指導室に来い！」

ああ、最悪だ

こいつのせいで初日から問題児扱いだ…

「必ず助けに行くからね」
いきなり耳元でささやかれたので、顔をあげてみると堯人がいつの間にか横に立っていた。
あまりの近さに一瞬戸惑ってしまった。
すると、堯人はそのままどこかへ去ってしまった。
「え、いや！とゆーか、そもそもお前が原因だろうが！」
そんなツツコミはもう届かなかった。

「こつちだ！入れ！」
うっ、まるで囚人の気分だ…
扉を開くと、中にはイスが一個と机があった。
その一個のイスにはなぜか白衣の女性が座っている。

「主任！、問題児がいました！指導を頼みます！」
とりあえず、この体育系の先生はうざい、と私は一つの事実を知った気がする、気のせいかもしれないけど。

「あらら、可愛い問題児ね、そんなに可愛いと私のムチが出ちゃいそうよ」

そう言いながら、手にはムチ…だけじゃなく縄や蠟燭まである。
そしてこの女は怖いな、と私はもう一つの事実を知った、今度は気のせいじゃないだろう。

事情聴取

「さあ、事情聴取を始めましょうか」

.....
この先生、口調はおっとりしてそうだけど.....

周りにある拷問器具のせいで、それを素直に受け取れないっ！
そして学校はこんな人を野放しにしてるのよ！

「それじゃ、どうして堯人様を蹴ったのか訊きましょうか？」
ペシン！とムチが鳴る。

あわわわわ！

このままじゃ何かをされるっ！

私が縮こまっていると、私と対になっている向かいのドアが開いた。
変態紳士の登場らしい。

「そのお嬢さんは僕の行動について不満を持っているようです。つまり、僕がその行動を改めれば良いと言うこと。よって僕は彼女の解放を望みます！」

う、うわあ.....。

正論ではあるけど.....。

女子だったら誰でもパンツ見られたら蹴るよね。
でも、今回は奴を頼るしかないっ！

「うーん、堯人様がそれでいいなら私は構わないけど.....他の人達が黙っておかないんじゃない？」

「そこについては問題ありません。彼等は『減給するぞ？』の一言

で押し黙りますから」

「ならいいわ。はい、行ってらっしゃい」

この堯人とか言う男…。

部下の真意に気付かなくて、幸せね。

でも、助けられちゃったな。

お礼はしなくちゃいけないよね。

「…あ、あの！さっきは、ありがとう…」

「ああ。『助けに行くよ』って言ったでしょ？有言実行できないよ
うじゃ、男の名が廃るからね」

……………この人って、本当は結構…

「でも、まさか本当にイチゴ柄とはね。僕の勘も捨てたものじゃないな
いな」

……………本当に結構変態なんですね！

「もう！あなたは常識ってものを知らないんですか！？ならいいで
す！それじゃ！」

助けにきたり、遊んでみたり、セクハラしてみたり…。

本当になんなのよっ！

クール系男子

「もう・・・なんなのよこの学校はっ!」

・・・変態堯人に変態な先生・・・

もう二度と堯人の貰うものは貰わないことにしよう。

『ドンッ!』

「きゃあああっ!!!」

下を向いていたせいか誰かにぶつかってしまったらしい。
でも・・・あれ?

「・・・痛くない...」

「当たり前だ」

私はぶつかった相手に助けてもらったみたいだ。
つぶっていた目を恐る恐る開いてみる。

「っああっ!!!きゃああああっ!!!」

私のことを助けてくれた男の方を見て私は叫ぶ。

あっ!おもわず驚きすぎて叫んじゃった・・・
でも仕方ないよ。

目の前にいた男は堯人とは全く逆でクールな美形の方だった。

「どうしたんだ?」

「すつ．．．すいません！すごくかつこよくてっ．．．あっ！．．．！」

私ったら何してんのよ…

ああああ自分の頭の悪さに泣けてくる．．．！

「あああああああああ！！陽が杏を襲ってる！！！」

「．．．陽ちゃん．．．顔赤いけどどうしたの？」

「！！？？？」

後ろから堯人の声が聞こえたと思うと
次には女の子の音が聞こえた。

．．．ってかなんで呼び捨て？

真実

「いや、不意に横から来たのでな。少し驚いてしまっただけだよ」
「そうなの？陽ちゃん……大丈夫？」
「ああ。心配かけてすまないな」

……この人達って、どんな関係なんだろう。男性の方は見た感じイケメンで、女の子の方は純真無垢な感じだ。
でも……絵になってるなあ。

で、肝心の堯人だけど。
何でこの中に居るんだろう。絶対浮いてるよ。
あ、でも何で私も呼び捨てなんだろう。
まあいいや。

「本当に大丈夫なの？」
「心配するな」
「本当？」
「本当だ」
「確かめてもいい？」
「いいぞ」

チユ。

「本当。大丈夫みたい」
「だから言っただろう？大丈夫だって」
「うん。じゃあ、行こ？」

その後すぐに呆気にとられているこの二人を置いて、あっちに去って行った。

「ったく…気分悪いぜ…」

「ねえ…あの人達って…どんな関係なの？」

「彼氏彼女のカップル、と言いたいところだが…。ありゃ兄妹だ。兄妹でほっぺにキスとか…、シスコンとブラコンにしか成せない技だよ」

「……へえ。そうなんだ」

危うくトキメキかけるところだった……。

今日は世界の広さを身をもって体感したよ。

「と言うわけだから、俺と付き合ってみないか？ほら、さっきのよりはマシだろ？」

やっぱりそうきましたか！

確かに兄妹愛よりは現実的だとは思っけれどもっ！

でも、こんな変態とは付き合えない！

「嫌あああああああああああああああああ！！！」

「ちよ、どんな捨て台詞だよー！」

何で私ばかりに付き纏うのよお！

自業自得

中庭。

杏は息を切らしてた。

さつきから堯人がしつこく追いかけてくるからだ。

「ったく、なんなの？あの男？」

「堯人って言ったじゃない。」

「ギイヤーアアアアアアア！」

上から堯人がイキナリ返事をしてきたので、杏はビックリして叫んでしまった。

「な・・・なんでココにいるってわかったのよ？」

「だーからー、ここには詳しいの。どこが一番全体を見やすいとか、そういうのはもう知ってるから。」

「ふ・・・ふん。まあいいわ。もう近寄ってこないで。」

「まあ待ちなよ。まだ君がどうしてここに来たか聴いてない。」

「あ、そういえばまだ言ってなかったっけ。」

杏は初めて会った時の事を忘れていた。

「実は両親が交通事故で死んじゃったの。今はアパート祖母の家に住んでる。」

「学費は？」

「父がやりてのビジネスマンでさ。結構貯めてたらしいの。私は詳しく知らないけど。」

「ふん。」

堯人はしばらく黙っていた。
その後、こう言った。

「なあ、俺今日放課後行くわ！お前の家！」

「は？来ないでよ！というか家教えないわよ！」

杏はそう言いながら追い払うようにして近くの石……いや岩を投げた。

が、明後日の方に飛んでいき、

ズボツ！

ビニールハウスを破った。

「あ……」

「あゝあ、これ校長が大事にしたのに……どうするの？入学早々こんなことを。」

堯人は真面目な口ぶりで言った。

口元はにやけていたが。

「お願い！なんでも言うつこと聞くからこれは内緒にしといて……」
「ならおまえんち行く。」

杏が全て言い終える前に、堯人はそう言った。

準備

こいつは石（岩だった気がするけど、もう済んだこと）が投げられる位置もコントロールできるっての！？

偶然にしても、あんな弱みを握られるなんて…

あの後、仕方なく私は家の住所を教え、犯行現場に長居はしたくないので、そのまま撤退。

目的を果たし終えたのか、堯人はもう追ってこなかった。

とゆうか、初日から異性を家に招くってどうゆう事よ！

しかも、よりによってあんな変態を…

私なにやってんだろ…

今日は手続きなどの事しかしないので、ハプニングはあったものの、昼過ぎのはやるべきことをやり終えた。私だって、堯人がいなければ出来る娘なんだから！

校長との挨拶はさすがに罪悪感といったものがこみあげてきたのは、もう過去のこと。

昼は外で軽く食べておこう。

あいつは、学校が終わったらすぐ行くと言っていたので、だいたい学校の終わる4〜5時までには家に居なくちゃいけないはずだ。

ちなみに、部屋の中はさまざまい惨状になっているが、部屋に入れる気などさらさらないので、放置していても問題ないだろう。

さてと、今は1時半。まだ時間はある。

そういえば、教材をそろえなくてはいけなかったんだっけ。

正式に学校に通うのは明日、明後日の休日をはさんでなので、急ぐ必要は別がないのだが、

ちょうど暇だし、懐はパンパンだ。

手元にはさつき貰った、必要な教材リストもある。

さっそく、私は本屋に向かう事に。なかなかの都会なこの町を歩い

ていく。

ちなみに、目的地には徒歩で40分かかるが、バスや電車に乗らないのは、決して乗り物が怖いからじゃない。

ここからの徒歩描写はカットして、アツという間に40分後。

私はリストに書いてある教材を選んでいき、順調にそろえていく。しかし、順調なのはここまでだった。

「これって、どっちを買えばいいの？」

リストには、「良い子の数学教室」とあるが、本屋には「良い子の数学教室」シリーズが3冊あり、

なら、全部買えばいいのかと思うけど、リストの個数の項目には一冊と書いてあるし。

とりあえず、全部を買えばいいんじゃないかな、と値段を見るが、さすがに3000円もするものを間違えて買うのは嫌だ。

「なに見てるの？」

私が困り果てていると、横から堯人の声が聞こえた気がした。きっと疲れているんだろう。

…なんて現実逃避はいつまでも続かない。

「なんでここにいるのよ？」

「学校だるいから早退して、杏の家行こうかと思っいたら行く道に杏の姿があつたから」

「あなたの不真面目っぷりにはもう突っ込まないわよ…疲れるから」
「ねえ、何か悩んでるの？恋の悩みになら乗るよ」

「あなたには恋の相談なんてしないわよ。第一、恋の悩みじゃないし」

「じゃあ、何悩んでるの？」

そうだ、こいつも不真面目とは言え、一応私と同じ生徒だ。

ここでは素直に頼るとしようか。

「この教材ってどれを買えばいいのかな、と」

「ああ、これね。この3冊の中にはないよ」

「はあ？」

「この本はうちの購買部限定品だから。著者が俺だし」

「はあ!？」今回は!マークもいつしよに

「だから、それは今度登校する時に買えばいいんだよ」

「お前の書いた教材って…信用できんな」

「そんなことないよ、俺頭良いから」

なんだか、考えるのに疲れてきた。

こうなったら、あるがままを受け止めよう。

私は、買うべきものを持ってレジに向かった。

買い物を済ませ、堯人といっしよに本屋をでる。

「さあ、じゃあ行こうか」

そう言つて、歩きだす堯人。

「お前、バスとか乗らないのか?」

私は怖いから…じゃなくて、経済的に乗らないけど。

「いや、乗り物つて怖いじゃん」

同類発見。うれしくないけど

お祖母ちゃん

「遊園地のジェットコースターとかも怖くてさ！」

少し体を震わせながら言う堯人。

へえ・・・？可愛いところもあるじゃないw

「CMとかでも流れるじゃん！？どうして皆あんな平気で乗れるんだろっていつも思うんだよね」

「そうかな？私は案外好きだけどなw」

「そうか・・・？じゃあ杏の嫌いな乗り物は？」

嫌い・・・？

そりゃ・・・決まってるでしょ？

「お化け屋敷よ」

うっあああ口にするだけで怖くなってくるわ・・・！

「まじで？」

「まじですよ！そもそも幽霊自体怖くて仕方がないのにあんな物作ってっ！！！！」

幽体離脱とか心靈写真とか金縛りとか妖怪とかそういうの本当に怖いよねっ。

「堯人と大体一緒よ。どうしてあんなの中に入れるのかしら」

不思議で不思議で仕方がないわよ！！！！

「あつ・・・（杏可愛いっ！！！！）俺は大丈夫かなw」
「そっ?」

つてか堯人異様ににやついててきもすぎるんだけど。

「あつ！家見えてきたわよ！あれよ！」

丁度前を見ると家があったので私は指をさして言った。

「へえ・・・?なんか俺の部屋見たいな家だな・・・」

・・・こいつなんて言った?

「え・・・つともつかい言ってくれるかな?堯人君」
殺気のオーラを出しまくりながらにこりと笑って私は言った。
堯人はただならぬ殺気を感じたのか

「何も言つてません」
と涙目で言った。

「あら?杏ちゃん?」

私を呼ぶ声が聞こえたので後ろを向くとそこにはお祖母ちゃんがいた。

堯人はお祖母ちゃんの姿に驚いたのか私に小声でしゃべってきた。

「なあ?この人誰?もしかして杏のお姉ちゃん?」
「違うわよ。この人は私のお祖母ちゃん」

「お祖母ちゃん!????」
耳元で大声を出す堯人。

ああ……つるさ……

お祖母ちゃん part 2

「少々黙っていただけませんか？」

「だって！だってさ！この外見でお祖母ちゃんだぜ！？おっぱい垂れてねえもん！」

本当に黙ってもらいたいんだけど…。

でも、私にとっても若く見えるとは思っ。

「杏ちゃん、この方は？」

「ああ、このバカは只の…『恋人ツ！』…なだけ」

……………。

「巫山戯るよ？」

「巫山戯てない…さ。だからその手…を…除けてくれ…え…」

気が付けば、私は堯人の首根っこを掴んで締めていた。

やば…。

また反射的に手が出ちゃった…。

何これ癖？

「ポ、ポリフェノールたっぷり…」

「大丈夫かい？駄目だよ杏ちゃん。人をいじめちゃ」

「いや、そんなつもりは無いんだけど…」

「へへ…ブルーベリー…」

「それじゃ、あたしは家に戻るからね。これからも元気でやるんだ

」

お祖母ちゃん part 3

「さ、あがってあがって。」

お祖母ちゃん、なんか機嫌よさそう。

私に友達できたと思ってるのかな。

こんな奴友達じゃないわよ!!

「おじやましまゝす!」

堯人は元気な声を張り上げながら入ってきた。すると玄関に飾ってある絵を見て、

「お、杏、この絵誰が描いたの? 凄く上手い。」

「それは親戚の伯父さんが書いたの。ちなみにこの絵の山、何かわかる?」

「槍ヶ岳。」

へえ。詳しいじゃん、コイツ。

「アンタ山登ったことあるの?」

「中2の時に1回。杏は?」

「こんなかよわい女の子が登ると思う?」

「いや、太ももムチムチだし。ムチ子だし。」

ガツガツガツ

「ごめんごめん。冗談だつて。」

ガツガツガツ

「痛っ! 言っとくけど、痛いよ? 脚。」

ガツガツガツ

「痛いって！ねえ！」

「よくも思春期の乙女を『ムチ子』なんて言ったわね！屈辱！」
「だから、冗d・・・」

そのとき、

「さあさあ、二人ともそんなとこいないでコツチきなさいな。」

というお祖母ちゃんの一言で、『ムチ子事件』、終幕。

嗚呼、コイツを家に入れるのか・・・

遊戯

さて、家に来てしまった堯人を追い返すことは無理だろう。
ならばどうするか？

何事も無く帰って貰う！

これが、今のミッションといえるだろう。

部屋は危険なので、居間に案内する。

「あれ、部屋には行かないの？」

「もう少し、常識ある大人になつたらね」

「大人になつたら、良いんだ」

堯人がどう捉えたかはスルーしよう。

居間につくと、勝手に腰を下ろす堯人。

「さてと、じゃあ、さっそくなんかゲームしようか」

「はあ！？なんであんたとゲームなんか…」

すると、いつになく真面目な顔になる堯人。

「近年の恋愛漫画の類では、こういう場合いちゃいちゃ出来るゲームをするんだろうが、ここはあえて、そのパターンを否定しようと思っただ」

「は？意味はわかんないんだけど…」

「ここにきて、そのゲームはないだろう、と思うゲームをしたいんだ」

「あ、えつとたとえば何を？」

「なんか、凄い威圧感だ…」

「麻雀とかそういう類のものだよ」

「ああ、なるほど、私麻雀はわかんないわよ」

「じゃあ、ほかになにがあるか考えてみよ」

堯人「わかんない」

杏「同じく」

ボツ

案2：トランプ

堯人「だいたい知ってる」

杏「ババ抜きぐらいなら…」

ボツ

案3：囲碁

堯人「昔は神の一手を求めてたから」

杏「五目並べなら…」

ボツ

案4：将棋

堯人「もちろん、出来る」

杏「なんにも知りません…」

ボツ

「杏ってなんにも出来無いじゃん」

「う…、いや、こういつたゲームは苦手で」

「苦手なもの多いよ(笑)」

反論しようと思った所で、お祖母ちゃんが茶菓子とお茶を持ってやってきた。

「なにを話してるの？」

「いや、なんのゲームをしようかと」

「杏ちゃんなんにも知らないんですよ」

「ちゃんを付けるな！」

「だったら、簡単なゲームがあるわよ」

「え？なに？」

「男女がいるなら、やっぱり野球拳でしょ」

それを聞いた瞬間、私はフリーズ

「いいですね、それ」

と賛同する堯人。

「でしょ」

この流れでわかる。

たぶん、反論の余地はない。

遊戯 Part 2

「でも、やだあああああああ
流されてるよッ！」

お祖母ちゃんのこと逆らえないけど

ごめんなさい。

本当にごめんなさい。

断った私も悪いけどお祖母様お顔が怖いです……

「何を言ってるの！」

「そうだよ杏！出会って間もない二人がこうしてはd」

堯人が言い終わる前に首を絞めた。

「いいじゃないの。へるもんじゃn……すみません」

「杏ちゃん？」

お祖母ちゃんが私の肩をポンッと叩く。

そしてやけに真剣な顔と声で言った。

「女の裸なんて減るもんじゃないのよ。」

うわあああああ真剣な顔で何を言っているんだこの人は。

「おおwお祖母さんわかってるうう……本当にごめんなさい。」

私は堯人を睨みつけてからお祖母ちゃんの方を見た。

「ふふwそう?・・・でもそれだけ脱ぐのが嫌なら勝てばいいだけなのよ?」

野球拳は駆け引きだからねw

そう言ってお祖母ちゃんは笑った。

「もちろんお祖母ちゃんもするのよね?」

するとお祖母ちゃんはきらりと目を光らせた。

「何を言っているの?…私を誰か知っているでしょ?」

「うっ・・・はい・・・すみません」

「私はここでゆっくり見ていることにするわw」

お祖母ちゃんがお茶を入れに行くため私の部屋を出た。
すると堯人は私に寄ってきた。

「なあなああのお祖母さん何者?」

お祖母ちゃんの本性

「知らない人もいるんだ…てか、何で知らないのよ？」

「はあ？どういう意味だ？」

「私のお祖母ちゃんはね…、柔道師範八段で五輪優勝、槍術初段、それから……」

「もういい！お前の祖母ちゃんの凄さは分かったから！いや、お祖母様？」

そう。

だから私はお祖母ちゃんに逆らえないのだ。

しかも、ああいう腹黒で変態な性格だから余計に性質たちが悪い。

よりによつて野球拳だなんて……。

別に堯人の裸なんて見たくもないし。

「おい、杏。それならここはお祖母様に従つといた方が良くないか？ハアハア……」

「鼻息荒い！あんたの下心が手に取るように見えるわ！」

「じよ、冗談だつて。だからその足を退けてくれませんか？お前だつて起訴されたくはないだろ？」

「起訴つて、そこまでするつもりだったの！？」

私はパツと足を退いた。

「いんや。冗談」

「死ね」

「うわあああああああ！」

ちよつと！まだ何もしてないでしょ！

それにそんな大声出したら…

「どうしたの！？一体何が起きたの！？」

ほら、やっぱり来ちゃったじゃない！

「ああ…まだナニも起きてないのね。そこの堯人…と言ったかしら。甲斐性なしは嫌われちゃうわよ？」

「ちょ、お祖母ちゃん！私は別にコイツのことを好きなんて…」

「うおおおおおおお！杏！ベッドルームはどこだあああ！」

真に受けすぎだって！！

お祖母ちゃんに影響され過ぎ！

でも、このまま野外に放り出せば……！！

ステイプ

「ちょ、ちょっと止めるよ、杏!」

「五月蠅い! さっさと帰って!」

「まあまあ、杏ダメでしょ? お友達にこんなことしちゃ。」

「友達じゃないわよ!」

「そうです、お祖母様、僕たちは恋人なのです。」

「黙れ!」

私は堯人を無理やり玄関へと押しまくっている。

それをお祖母ちゃんが止めようとする。

これが今の状況だ。

「というかお祖母ちゃんなんでそんなに堯人の見方をしたいのよ!」

「だって自分の孫が創った子供も抱いてみたいんだもの。」

「そうです、お祖母様。同意見です。」

「アンタはいちいちいちいち・・・」

杏の右フックが堯人の脇腹へ直撃。

「グッ! 何をする!」

よし、利いてる!

杏がもう一発喰らわそうとした時、堯人は急にこっちを向いて、

「そういえば俺今日サッカーの試合観に行くんだ。よかつたら

杏もどう?」

「え?」

「まあ、いいじゃない、杏。でもいいの? 堯人君。」

「ええ、チケットなら余分に有りますし。よかつたらお祖母様も」

一緒にどうですか？」

「あら、ありがとう。杏、行くわよね？」

な・・・なんでイキナリこんな話に・・・そりゃここを出てっくれるのは嬉しいけど、もうコイツとかかわりたくない・・・。

「あ、私勉強しなくちゃいけないから。また今度。」
今度はないけどネ

「でもステイブも出場予定だぞ？」

「ステイブ様が？あのステイブ様が？」

「ああ、今女学生を虜にしてるあの選手だよ。」

「行く！」

「んじゃ、決定。」

こうして堯人、杏、お祖母ちゃん一行はサッカー観戦に急ぎよ行くことになったのである。

【おまけ】

ステイブ・・・20歳。

「鳥取勝負パンツーズ」所属。

イケメンすぎてジャーニーズが芸能界を去ることに。

感染：じゃなくて観戦

私だって、普通の女子高生なのだ。

恋には興味があるし、人気の小説だって読むし、そこそこ勉強に時間を費やしたり、そんな一般的な女子高生なのだ。

だから、好きなサッカー選手が生で観れるなら、たとえ変態と恐人祖母といっしょだろうとテンションが上がってくるものだ。

そんな風に考えてた私がバカだった。

いくら、好きなサッカー選手（サッカーのルールなんてもちろん知るわけではないが）のプレーを観戦しようが、隣に座る二人がいる限り、テンションが上がるなんてありえなかった。

「堯人君はどんなプレイがお好みなの？ちなみに杏はSMプレイが大好きなのよ」

「ちよつと！なにでたらめ言ってるのよ！」

「ああ、Mっぱいなあとは会った時から思っていたんですよ」

「人の話を聞きなさい！」

疲れる…

私は、テンションが乗らないまま試合に目を向ける。

ほかの二人も静かに試合を観だした。

今の状況は、スティーブのチームは彼のゴールで一点入れて、勝っている。

あ、笛が鳴った。

私はルール知らないから、なんで笛なったのかわかんないけど。

すると、前の方から「今のはオフサイドじゃないだろ！」

とやじが飛ぶ。

どうやら、サイドはオフかそうでないかで争っているようだ。

サイドにオフもオンもあるのか知らないけど

すると、そのあとにゴールに向かったボールをキーパーだっけ？が華麗に止める。

おお、と会場が沸く。私たち二人を除いて。

こんなに、こんなにも同じ場所に居る私たちとそれ以外の人たちのテンションの違いには驚く。

まるで、私たちだけが、この世界から隔離されたような、そんな感覚。

この私たちの隔離された世界が壊れて、このテンションがみんなに移ったら申し訳ないな、と思った。

すると、そこでスティーブのチームが1点決められてしまう。

ああ、と周りが嘆くのに、相変わらず私たちは静かだった。

10分後、また入れられる。

スティーブの動きが鈍ってきた。

疲れたのだろうか。

さらに、15分後、またも点を決められる。

周りのテンションが下だつてくる。

ああ、私たちの隔離された世界が壊れていく。

私たちのテンションが感染していく感じ。

もちろん、私が一方的にそう感じているだけなんだけど。

また、一点とられる。

スティーブも限界なのか、交代された。

それだけで、周りの女連中は（私含め）テンションがさらに下がる。

すると、突然、隣の堯人が立ちあがった。

なにをするのかと思えば、「まだまだ、いけるぞ！！」と大声で叫び始めた。

「がんばれ」や「そこだ！」などと、大声で叫ぶ堯人は、堯人のキヤラじゃなかった。

変態ではなく純粋なファン。

そんなの堯人のキヤラじゃない、と思う自分もいるが、それもあいつのキヤラじゃないかな、と思う自分もいた。

すると、周りの観客も、堯人の応援に便乗して、声を出し始める。

大人も、子供も、老人も、男も、女も。

そのうち、試合始めと同じ熱気に会場が包まれた。

私は、その時、二つの事を考えていた。

ひとつは、やっぱり、テンションなんかの類なものは感染していくんだなあ、といったこと。

二つ目は、そういえば、今日は9時から観たいテレビがあったな、といったことだった。

初めての友人は・・・変態さん

すっかり暗くなった道を二人で歩いた。
お祖母ちゃんは先に家に帰ったのだった。

「いやああww杏のお祖母ちゃんいい人だよなww」

「なんで??？」

「だってこうして二人つきりにしてくれたじゃん」

はっ?こいつの思考回路はいったいどうなってるんだろうか。

「今日から堯人のことバカって呼んであげようか?」

「いやだよっ!」

「今日のサッカーすごかったね!ステイブかつこよかった!」
あのとステイブのチームは無事逆転して勝ったんだよw
周りの歓声が力になってくれたのかなw

・・・あのとときの堯人・・・かつこよかったなw
別人みたいで!

今の堯人は微塵もさっきのかつこよさとかはないけどね!

「・・・」

二人の間に沈黙が続く。

ちらりと堯人のほうを見てみると

ブクリとほほを膨らました堯人がこつちを見ていた。

「!!--」

びっくりした・・・ってかなんで見られてるのかしら。

「・・・ってか今日は友達がたくさんできるはずだったのに堯人のせいでできなかったのよ!」

まあ・・・楽しかったけど

「変態女の先生に会うし。あと変な兄妹にも会うし」

「別にいなくてもいいじゃん?」

「なにが?」

「友達だよっ!俺だけでいいじゃんか!」

・・・何を言っているのかな?

「友達は必要に決まってるでしょ?」

一緒にプリとつたりお茶したり歌を歌ったり・・・

しかも堯人とは友達すらないし!

私はあんたのことなんか変態としてみてるし!

「私はあんたとはクラスだって違うし学年だって違うじゃない」

よってあなたと私はまったくの他人。

わかった?

「何言ってるんだ?俺は杏と同じ学年だし同じクラスだぞ?」

言ってるなかったっけ?

そういつて首をかしげる堯人。

そんなこと一言も言っていないわよっ!

「ん!ということなんで今日から友達としてよろしくな?杏」

よろしくしたくないわよっ!

っ
てか私に握手を求めるのはやめて欲しいわ・・・。

「隙があればどんどん行くからさ!」

私の体がどんどん冷えるんがわかった。

裸エプロン(ばっぴ。)

「ま、今日はこの辺にしといてやるよ。じゃあ、また明日な！」

……………どの辺？

…とりあえず一難去った訳だけど、お祖母ちゃんは真っ直ぐ家に帰ったのかな。

いくら強いからと言っても歳だから。

<帰宅シーンは割愛しますっ >

「ただいま……………」

「おかえりー」

「……………Who are you？」

「I'm 堯人」

「I don't know」

「そんなこと言うなって」

「堯人、その電話取って」

「ああ、別にいいけど……………」

カチャ。

ブルブル……………。

「あ、もしもし、犯罪者が……………」

「ちょおおっとまったあああああー！…！」

ガチャ。

「何すんのよ!」

「それは待て! シャレにならんぞ!？」
「シャレにしたいなら、もう付き纏わないで…。」

「シャレになつてないのはアンタの格好でしょ! ……何それ裸エブ
ロン?」

「いや、パンツは穿いている。規制対象にならんようにな」

「十分だから! 冗談はお腹いっぱい!」

「『今夜は寝かせないぞ?』」

……………。

「うわああああ! 病気だああああ!」

「廊下は走っちゃいけません!」

「てか、鍵閉まつてるのにどうして侵入してるのよ」
「え? 開いてたけど」

・
・
・

(、;)

「泥棒とか、入ってないよね?」

「多分、大丈夫、だと思っ」

「ちよつと部屋確認してくる」

「行つてらー」

<探索シーンは割愛しますっ >

「どうしよう！少し配置が変わってる！絶対誰かが入った！」

「あ、それ俺やわ」

.....。

目の前のコイツは犯罪者の卵よ！
そして着実に孵化を始めている！

「俺の好きな部屋になるように多少改装させてもらったぜ。また一歩、俺好みの女に近づいたな！」

「下着とか盗った？」

「そ、そこまで堕ちてねえよ！」

堕ちてるから疑ってるんでしようが。
でも、コイツ、いろんな才能あると思う。

今の部屋だって結構センスあったし。
…私にセンスが無いだけかもしれないけど。

あれ？

堯人の服（床に転がってる）のポケットからホックが……。

この馬鹿……！

堕ちてやがる！

墮

もしや・・・と思い、杏は堯人のポツケを探る。

あ、なんか出てきた。

? ガム

なんだ、普通じゃん。

? 生徒証

普通すぎる・・・

? ロープ

えつと・・・アレかな?

万が一川で流されてる人を発見した時救助するようかな?

? 『せう学館

亀甲縛り入門 初心者編』

・・・
・・・
・・・
おいおいおいおい!

? 組み立て説明書

あっ!

この形は・・・!

杏は堯人の方を睨んだ……が、そこに堯人はいなかった。
「あれ？」

そのとき、隣の部屋から堯人の声が。

「できた！」

杏はおそろおそろ部屋をのぞく。

そ……それは尖ったイス！

まさかの組み立て式！

やっぱりコイツやばいわ！

前からわかってたけど！

このレベルだと最後には水車っぽいものにも手を出すわ！

そのとき、堯人がこっちに気づいたらしく、

「ドワアアアアアアアアアアアアアアア！あ……杏、どうした？これはイギリスの実家にいる弟のおみやげのだな……いや、決して使おうと思っただけじゃないんだ！うん！悪ふざけはこれでおしまい！ウン！」

「ゴッ！！！」

杏が投げた鉄アレイが直撃。

結局、堯人は気絶、杏はそのすきに堯人の私物を全部処分して事件（？）は幕を閉じた。

・ ・ ・ そついやお祖母ちゃんどこ行ったんだろ？
捜しに行こうかな？

歳

お祖母ちゃんを捜しに行こう。

気絶した堯人が起きてから、二人で話し合っただ案だった。

ちなみに、堯人が起きるまで待つてたのは、暗い所が怖いとか、そういうのじゃないですよ。

さて、そういう訳で、さっそく探しに行こうかと思うのだが、どこから行けばいいかわからないことに気付いた。

「とりあえず、そこらへん歩いとけばいいんじゃない？」

「まあ、そうよね」うん、一般的。

そういう事で、さっそく私たちは外へ、近所の道をぶらぶらと歩いていく。

途中で見つけたものといえば、ネコとカラスぐらいで、町内を一通り歩いてもお祖母ちゃんは見つからないかった。

「いないねー」

「そうね、町内をでてみましょうか」

と、言う事で町内をでることになった。

町内をでると、すぐに商店街がある。その商店街を外れると、公園がある。

とりあえず、そこらへんを歩いてみることにした。

商店街を歩いていると、柄の悪い青年が三人ぐらい歩いていた。

こちらをチラッと見てくるが、すぐに向こうが視線をはずしてきた。良く見ると、その青年たちは所どころに怪我をしているのがわかった。

どこかのチンピラと闘って負けたのだろうか？

勝利の傷とは思えない程度の傷で、最初気付かなかったのが、不思議なくらいだった。

堯人といえば、そんな彼らを興味なさそうに一瞥して、すぐに視線を外すだけだった。

…たぶん、こいつは変態だから、女にしか興味ないんだろうな、と偏見にも似た事を思った。

さて、商店街を一通り回ったけど、お祖母ちゃんの姿は見あたらなかった。

「そついや、こちら辺デパートあったよね？まだやってるんだっけ？」

「え？ああ、確か、まだやってるはずなんだが…」

「そこで買い物でもしてるんじゃないの？」

「ああ、お祖母ちゃん買い物すきだからな、公園見終わったら、寄ってみようか」

最初は近い公園から。

実際、公園にはあまり期待してはいなかったわけだ。

なぜなら、公園にはお祖母ちゃんに似合わないものが多いから、カップルとホームレスの集う公園には、お祖母ちゃんに合わないものが多い。

…と、思っていた私は間違っていたらしい。

お祖母ちゃんはいた。

公園の鉄棒に。

なにをしてるか？

ボクシングのまねごとを。

鉄棒の棒をリズムにのって、よけていくお祖母ちゃんは、歳を感じさせない優雅さがあった。

その姿をカメラに抑えようと、携帯を持ったギャラリーがたくさん集まっていた。

「歳を考えようよ…」

いくら、優雅だろうと、言わざるは言えなかった。

もちろん、お祖母ちゃんには届いていない、はず。

地獄耳

絶対聞こえてないわよね???

私は下に向けていた視線を前に戻すとそこにはにっこりと笑ったお祖母ちゃんがいた。

「ふえっ!!」

「おっ!いい声ww」

すぐに兇人を抹殺する勢いで蹴りをかます。

「うわあっと。ふふww何度も同じ目にはああぐほあっ!」

・・・けどよげられると思ったので強烈なパンチをお見舞いしてやった。

「杏ちゃああん??」

「は・・・い・・・」

怖いよ怖いよ怖いよ・・・っ!!!!

ニッコリ笑うお祖母ちゃんより怖いものがないくらい怖いです。

「歳歳っていうけど私はそんなに老けてません!」
はいそうですね。

これって遺伝なのかな?ひいお祖母ちゃんもその前のお祖母ちゃんも写真をみる限りすっごく美人さんだし。

もしかして私もこのまんま??

嫌だよ...せめてもう少し美人さんに産んでほしかったよ

ママ...

「お祖母様つて実際何歳なんですぐあいつ!!!!」

「女性に年齢を聞くのは最低な行為よ？」

「すいませんすいませんでした！なので膝にもう一発加えようとするのはやめてください」

私はお祖母ちゃんと堯人のやり取りを見ながら考えた。

本当だ・・・何歳だっけ？

私の小さいときに45歳の誕生日をしたとこまでは覚えてるんだけど・・・

でもそうしたら最低でも50は越えてるわけ？

「杏ちゃん。人の歳を考えるのはよしなさい。」

「はいつ！すいませんでしたあっ!!」

さっきまでいたギャラリーはいつの間にかいなくなつて公園にいるのは3人だけとなった。

反省文

「私が思ったこと

時雨杏

私は、すぐお年寄りが何かしていると、「歳を考えて」等と言っければ、その人からすれば歳のことばかり言われて、嫌な気分になるとわかりました。

一所懸命頑張る心、その事に立ち向かっていく勇気や元気があれば、なんでもできるとも思いました。

1・2・3 ダー

「

私はあの後お祖母ちゃんから逃げれず、捕まってから反省文を書かされていた。

あのとき、あんなところに犬の糞さえ落ちていなければ・・・飼い主はしっかり面倒見ろっつもの！

「よろしい。もうあんな事言っちゃだめよ？」

「はい。」

「そして俺と一緒に寝よう。」

「は・・・あ？」

ズムウ！！

杏の右ストレートが堯人のボディに炸裂。

「ぐまあ！！」

「ったく・・・どさくさに紛れてなに言ってるのよっ！？危うく〇

Kしちゃうとこだったわ!」

「でも俺に罪を擦りつけようとしたんだから何かしら償ってもらわないと。」

「五月蠅い五月蠅い!もう帰れ!」

堯人は口をとんがらせながら玄関の方に行った。

なんだ、イキナリ素直になったじゃない。

「お祖母さん、今日はこのへんで帰ります。さようなら。」

「あらあら、堯人くん帰っちゃうの?もっとゆっくりしていけばいいのに。」

「いえいえ、今日は楽しかったですし、少し疲れちゃいましたので。」

「また来てね。」

「んじゃ杏、また後で!」

「また後で」・・・ってもう会わないわよ!」

「はは。」

堯人は帰って、杏は安堵感がハンパなかった。

さっきの短時間でお祖母ちゃんと堯人が目で会話してることも知らず・・・

泥棒さん

私はテレビを見ているとお祖母ちゃんが私に向ってしゃべった。

「杏ちゃん、ちよつとコンビニ行ってくるからお留守番よろしくね」

「え？そんなの私がいk」よろしくね」

「……はい……」

その時のおばあちゃんの顔はすごく怖かったです。

「んじゃあ、行ってくるわね？」

お祖母ちゃんが異様に笑顔で手を振りながら扉を出て行った。

「お祖母ちゃんがコンビニ……？」

お祖母ちゃんいつも何かあったらすぐスーパーじゃなかったっけ？
つてか買い物行ってなかったっけ？

んー……

「まあいいかあwテレビ見て『ガタガタアツ』へえっ！????」

今の後ろからの音だよな？

テレビを見ようとリビングに行こうとしてたけど恐る恐る後ろを見ることにした。

「あつ！あれだよっきつと堯人だよっ！私のこと驚かそうとしてるんだよ」

私は怖すぎて震える体を自分自身で抱きしめた。

『ガチャっ』

「もうっ！ 堯人っ何の冗だん・・・」

後ろを見ると堯人はいなくて知らない男の人が立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5804n/>

仮定

2011年10月7日23時14分発行